



Title	現代デンマーク語のs-passivとblive-passivの用法について
Author(s)	新谷, 俊裕
Citation	IDUN. 1990, 9, p. 65-92
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95612
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

現代デンマーク語の s-passiv と blive-passiv の用法について

新谷 俊裕

1. 序

辞書はどういう時に役立つか。

漢字をたしかめたいときに使う，これがいちばんふつ
うの利用法だろう。

ことばの意味を知るために使うというのがほんとうは
望ましい使い方なのだが，あまりそういう使い方はしな
いようだ。

国語学者，見坊豪紀の随筆「辞書への態度」の冒頭である。デン
マーク語作文の授業で筆者と学生たちが数ヶ月前に取り組んだばかり
の課題である。デンマーク語訳はまずは，

(1) Hvornår er ordbøger nyttige?

で始まる。では，その次の文はどう訳すか。(2) あるいは (2a) の
ようにできる。

(2) Man bruger dem til at kontrollere *kanji* med, og
det er nok den almindeligste brug.

(2a) De bruges til at kontrollere *kanji* med, og det er
nok den almindeligste brug.

(2) と (2a) とでは始めが，Man bruger dem か De bruges か，
とわずかに違うだけである。(2) は能動文，(2a) は受動文である。
日本語の原文は能動文であるが，日本語が無生物を主語とする受動
文を好まないからといって，対応するデンマーク語訳も能動文にし

なければならないとはかぎらない。(1)で主語を *ordbøger* としたので、主題を統一するため、これを代名詞 *de* で受け、主語とした(2a)のほうを筆者は選んだ。すると全体の訳は次のようになる。

Hvornår er ordbøger nyttige?

De bruges til at kontrollere *kanji* med, og det er nok den almindeligste brug.

Det er med det formål at finde ud af ords betydninger, (at) de ideelt set burde bruges, men de synes ikke at blive brugt på denne måde.

ところで、この試訳には受動表現が3つもあり(*bruges*, *burde bruges*, *at blive brugt*)、全体に占めるその割合は大きい。我々が日頃デンマーク語の文章に接していて感ずることに、受動表現はあまり多く用いられてはいないということがあろう。では、上の試訳のように受動表現を多用してもよいのだろうか。

Løj & Wille の「受動態は使わずに済ませることができるのか」という論文(Løj & Wille 1985: 7f.)によると、Poulsen¹⁾を初めとするデンマーク語の用法ガイダンス(*sproglig rådgivning*)では、

- ① ほとんどの人が受動文を用いている。[筆者付記：しかし、これは好ましくない.]
- ② 受動文を用い動作主を省略することで、ごまかしをしている。
- ③ 能動文のほうが受動文よりも理解し易い。
- ④ 能動文のほうがずっと直接的である。

という理由からできるかぎり受動文を避け、能動文を用いるように勧めているそうであるが、Løj & Wille は、内外の文献や実際の調査などを考察することによって、上記 ① は Rehling 1934 と Aa. Hansen 1967 の調査結果に反しており、事実ではないとし、②～④は文法的根拠のないもので、文章の内容の理解や記憶に関する実験調査もこれを裏づけるものではないということを指摘する。

Løj & Wille: 14f. はデンマーク語の受動態²⁾の文法的、文体的機能は次のようであると言う。

- 動詞行為に一方的に焦点を合わせることによる文の非人称化 (der+受動態, det+受動態, 動作主 (agens) の削除を伴う受動態への態の転換)
- 主語が一般的なものである場合の文の一般化 (der+受動態, 動作主の削除を伴う受動態への態の転換)
- 受動者 (patients) とそれに相当する他の文要素のテーマ化 (動作主の削除を伴う受動態への態の転換と動作主の削除を伴わない受動態への態の転換)
- 動詞行為のテーマ化 (der+受動態)
- 既知であり, かつ明らかにほのめかされた動作主の省略 (動作主の削除を伴う受動態への態の転換)
- (文体的に) 容認できる, 動作主を表す呼び名がない場合の動作主の省略 (動作主の削除を伴う受動態への態の転換)
- 明らかにほのめかされてはいるが, 実際には未知の動作主の省略³⁾ (動作主の削除を伴う受動態への態の転換)
- 動作主に関する, 既知ではあるが不快な情報の隠蔽 (動作主の削除を伴う受動態への態の転換)

Løj & Wille: 34ff. はまた, 受動文を選択するのは前後関係, つまり文章の流れの中で決定することが多いとして, 次のような場合を挙げている。

- (たとえば受動態への態の転換によって) 文要素を文頭域に置きテーマ化することによる文章の前後関係の連結
- 一連の文が同一の動作主を有する場合, 受動態への態の転換と動作主削除による新情報の強調
- 様々な文形式による文体的多様化
- 首尾一貫した文体的特徴による文体の統一

man vier stoffet sammen, for det bliver sammet. (Nao)

したがって、能動文を書くか受動文を書くかという選択は次の点を考慮してなされるべきだとする (Løj & Wille: 40).

- 文章の種類と目的 (学術論文か, 使用説明書か, 料理の本か等等)
- 前後関係
- 多様性 対 一本調子
- 親密さ (あるいは見せかけの親密さ)

つまり、場合によっては能動文よりも受動文のほうが適切であったり、能動文が不可能なこともありうるということである。

以上のことから、本節の初めに示した試訳は受動文が好まれる場合の一つと言えよう。

ところで、デンマーク語の受動態には屈折語尾 *-(e)s* による *s-passiv* (以下, *s-P* と略することがある) と *blive*+過去分詞による *blive-passiv* (以下, *b-P* と略することがある) があるが、上の試訳中の *De bruges, burde bruges, at blive brugt* をそれぞれ *De bliver brugt, burde blive brugt, at bruges* としてもよいのだろうか。

デンマーク語の受動文を作る場合に、*s-P* と *b-P* のどちらを用いてもよいのか、あるいはどちらか一方を選ばなければならないのか。本稿では、この点に関して考察する。

2. *s-passiv* と *blive-passiv* の基本的違い

Løj & Wille: 16f. によれば、*s-P* には屈折変化として、不定詞 (不定詞では裸不定詞、つまり *at* の付かない裸の形だけが用いられる)、現在形、過去形がある。一方、*b-P* には不定詞 (裸不定詞と *at*-不定詞、つまり *at* 付き不定詞)、現在形、過去形、現在完了形、過去完了形がある。また、*s-P* は強変化動詞 (例: *bede, byde, smide, tvinge* 等) の過去形ではふつう用いられないが、

s-P の過去形そのものが避けられる傾向にあると言う。s-P はまた堅苦しく、書き言葉的であり、b-P は話し言葉的であると言う。

以上のことから、s-P と b-P との間には、屈折変化（時制）上の違いがあり、文体的にも違いがあることがわかるが、意味の違いがあるかどうかは不明である（Schiøler & Hansen 1986: 12 も同様に s-P と b-P の表す意味に関しては一切無視している）。

この点に関して、外国人向けのデンマーク語学習書、文法書（本稿の参考文献リストに挙げたデンマークと我が国出版のものについて大なり小なり言えることだが）は、次のように述べている。

- s-P は反復、習慣や長期間にわたる行為、状況を表し、b-P は単独（一回的、一時的）の行為や新たな状態への移行を強調する。

さらに、

- b-P は（法の助動詞との特定の結合を除いては）たいていの場合に s-P の代わりに用いることができる。
- 話し言葉では b-P を好む傾向にある。
- s-P は強変化動詞の過去形ではほとんど用いられず、s-P 自体の過去形が避けられる傾向にあると言う。

（これらの点に関してはデンマーク人向けの文法書 Diderichsen 1976, Aa. Hansen 1967, Mikkelsen 1975 がさらに詳しい。）

以上のことを確かめるべく、筆者は小規模な調査を行った。MF1-3 (= *Myrens fortællinger* 1-3) と FJ (= *Familien Jensen*) の4点中の受動態をすべて集録した。MF1-3 は外国人のためにデンマークの現代作家19人が書き下ろした短編小説（2編の詩を含む）である。一方、FJ は外国人および移民のためのデンマーク語学習テキストで、同時にデンマーク事情についての簡単な案内書とも言えるもので、そのため説明調の文が多い。調査の結果は表1のようになる。

表1 MF1-3, FJ における s-passiv と
blive-passiv の頻度数 (完了形は表から除外する)

		MF1-3		FJ		MF1-3, FJ	
			小計		小計	全体	小計
at-不定詞	s-P	0	6	0	5	0	11
	b-P	6		5		11	
裸不定詞 (法の助動詞 と共に) ⁴⁾	s-P	23	23	45	54	68	77
	b-P	0		9		9	
現在形	s-P	5	10	48	62	53	72
	b-P	5		14		19	
過去形	s-P	5 ⁵⁾	36	1	24	6	60
	b-P	31		23		54	
合計	s-P	33	75	94	145	127	220
	b-P	42		51		93	
合計 %	s-P	44	100	65	100	58	100
	b-P	56		35		42	

MF1-3, FJ 中の s-P と b-P は不定詞, 現在形, 過去形を合計すると220例である。そのうち s-P は127例で全体の58%を占める。これは Rehling 1934: 87 の「s-P は平均して全体の半分強, 60% 近くまで用いられている」という調査結果とまさに合致している。s-P は小説 (MF1-3) では44%と比較的少なく, 説明文の多い FJ では65%と増加していることも, Rehling: 87ff. や Aa. Hansen: 52ff. の調査結果が示す傾向と合致している。また, Rehling: 83 によると, 受動文で動作主が明示されているのは平均して全体の

10%よりも少ないが、MF1-3, FJ 中の受動文の例は完了形を含めて 290例で、そのうち動作主が明示されているのは37例、全体の12.7%であり、これも Rehling の調査結果とあまりかけ離れていない。

以上のことから、筆者が行った調査は、規模はそれほど大きいとは言えないが、統計的に信用してよいと思われる。

以下では、筆者が行ったこの調査を基にして、s-P と b-P の用法について考える。

3. 現在形

§2 で見たような、b-P の一回的行為や新たな状態への移行を強調するという特徴は、助動詞 *blive* の本動詞としての意味〈～になる〉〈くとどまる〉という意味の *blive* ではない)を考えれば容易に理解される。〈～になる〉という意味からわかるように、*blive* は完了相動詞(perfektiv)で *være* 〈～である〉という未完了相動詞(imperfektiv)と対立する(cf. Diderichsen 1976: 130, E. Hansen 1972: 9ff.). b-P が完了相動詞 *blive* の特徴をもち、一回性、新たな状態への移行を表すのに対立して、s-P は未完了相動詞の特徴をもち、継続、習慣等を意味する。⁶⁾

Har man en formue på over 341.000 kr. bliver éns socialindkomst også forhøjet noget. (FJ: 56)

〈もし341,000クローネ以上の財産があると、“社会収入”もまた幾分上げられる。〉

Det er altid sådan en grim overraskelse, når telefonregningen kommer. Når man bruger mønttelefon, mærkes det ikke så meget. (MF1: 47)

〈電話料金の請求書が来るといつもいやなショックだわ。公衆電話だとそうでもないでしょう(それはあまり感じられない)。〉

完了相動詞の現在形は未来の動作、行為を意味するので、b-P の

現在形も未来の出来事を意味する。

Vi må overgive os, sagde senor Deli, vi er fortabte, og det lige før vi skulle til at spise. - Vi bliver sikkert selv spist, sagde Sir William Faulkner, der er kannibaler på dette strøg. (MF3: 14)

〈我々は降参しなくてはならないでしょう, とセニョールDは言った, もはやこれまでだ, それもこれから食事をしようってときに. - 我々自身がきっと食べられてしまうよ, とWF卿が言った, この辺りには人食い人種がいるんだもの.〉

以上のことから, s-P と b-P の基本的違いは未完了相か完了相かということであろう。

ただ, 新しい状態への移行が何回か繰り返される場合には blive は反復相を表す.⁷⁾ 反復相は未完了相の一つである。

Jeg bliver nervøs, hver gang telefonen ringer.

〈電話が鳴るたびに私は不安になる.〉

同様に b-P も反復相を表す。

Jo, folk bliver ofte myrdet i skove, sagde jeg. (MF1: 46) 〈つまりだな, 森でよく人が殺されるってことだ, と私は言った.〉

Somme tider bliver lyset i deres soveværelse tændt midt om natten. (MF2: 52)

〈時々, 真夜中に彼等の寝室の明かりがともされる.〉

b-P はさらに一般性のあることについても用いられることがある。

Højskoler er kostskoler, altså skoler hvor man bor og spiser foruden at man bliver undervist på dem. (FJ: 44)

〈国民高等学校は寄宿学校である。つまり, そこで授業を受けるだけでなく, そこで寝泊まりし食事をする学校である.〉

Byg bliver brugt især til ølbrygning og foder.⁸⁾

(秦：98) 〈大麦はとくにビール醸造と飼料に用いられる。〉

以上のことから，b-P は s-P の領域（反復，一般性）を侵すことがあることがわかる．

反対に，s-P が一回的出来事を表す例は，MF1-3，FJ では次の1例だけである（それも MF のテキストではなく，まえがきの中で）．

Det er vigtigt at der er gode tilbud: tekster der er overkommelige i både længde og sværhedsgrad, og som samtidig er umiddelbart spændende og har en kvalitet så man bliver udfordret af dem, så der sættes tanker i gang, så man får lyst til at komme videre. (MF1: 8)

〈条件が整っていることが大切である．つまり，文章が長さや難易度の両方の点で無難で，内容がまさに面白く質の良いものであって，それで読者が駆り立てられ，思考が活動させられ，先に進もうとする気になるようなテキストである必要がある。〉

文体によっては，s-P が用いられることがある．

Professor Nielsens forelæsning aflyses p. g. a. hans sygdom. (秦：98)

〈ニルセン教授の講義は病気のため休講とします。〉

全般的に見て，s-P と b-P の用法は，実際にはかなり入り乱れている感がある．次の例も同様である．

Præsten holder da som regel en ligtale ved kisten inde i kirken, inden kisten bæres ud på kirkegården. Et stigende antal danskere bliver i dag brændt i stedet for. I nogle tilfælde spredes deres aske på de ukendtes grav, i andre tilfælde bliver deres urne nedsat i en personlig grav på kirkegården. (FJ: 52)

〈その場合，棺が墓地に運び出される前にふつうは牧師が教会の中の棺のそばで追悼の辞を述べる．今日ではそのかわりに

火葬にされるデンマーク人の数が増えている。彼等の灰が無縁墓地にまかれることもあるし、彼等の骨壺が墓地にある個人の墓に入れられることもある。〉

この文章が埋葬の一つのケースとして、その進行手順を説明しているのであれば、bliver båret, bliver brændt, bliver spredt, bliver nedsat というように b-P で統一するのが本来的なのだが、実際には som regel, et stigende antal, i nogle tilfælde, i andre tilfælde が示すように、この文章は埋葬の儀式の一般的説明である。したがって、bæres, brændes, spredes, nedsættes というようにすべてを s-P にするのが本来的であろう。しかし、実際には bæres, bliver brændt, spredes, bliver nedsat というように s-P と b-P が交互に用いられている。文体的バラエティーをもたせようとしたのだろうと推測できるが、これは筆者には好ましいこととは思えない。

さて、s-P と b-P の現在形の用法を見てきたが、外国人が受動文を作る場合に s-P か b-P のどちらを用いるべきかという本稿のテーマに対する答えは簡単には得られそうもないが、大まかに言って、次のようであるとしてもよいのではないだろうか。

外国人学習者がデンマーク語作文で受動態の現在形を用いようとする場合は、s-passiv は反復、習慣等を表し、blive-passiv は一回的行為や新しい状態への移行を強調するという基本的違いに忠実であれば、一番無難であろう。

論文や説明書等の書き言葉的な文章を書く場合には、それらの内容からして一般的なことを扱うことが多いであろうから、自然と s-P が多く用いられるであろう。

4. 過去形

過去形に関しても s-P と b-P には、§2 で挙げたような基本的

違いがあるのであろうか。§2 では、s-P は強変化動詞の過去形ではほとんど用いられず、s-P の過去形自体が避けられる傾向にあると記した。これが意味することは、s-P と b-P の基本的違いが過去形では中和される、つまり失われる傾向にあるということである。

MF1-3, FJ には受動態の過去形が60例あるが、そのうち b-P は54例あり、s-P はわずか6例である(表1)。b-P の例の8割弱は過去の一回の出来事を表している。

Anette blev standset af en mærkesælger. (MF1 : 34)

〈Aはステッカー売りに引き止められた。〉

Lidt efter blev togets ankomst meldt i højtalerne og straks efter kørte det ind på stationen. (MF3 : 41)

〈少しして列車の到着がアナウンスされ、その直後に列車が駅に入ってきた。〉

Og det var så mit punktum, og det var godt det blev sat, for ellers havde Mahmouds kone været der med kødretten igen. (MF3 : 63)

〈つまりそれが私の終止符だった。そして終止符が打たれて良かったのだ。そうでなければ、Mの奥さんが肉料理をまた運んで来ていただろうから。〉

b-P の例の残りの2割強は過去の反復的あるいは継続的出来事や一般的事実を表している。

Hvert år når der blev fældet i skoven, blev der plantet igen. (MF1 : 11) (反復的)

〈毎年森の木が伐採されると、再び植樹された。〉

Han sad og blev grebet af en frygtelig opstemthed.

(MF3 : 25) (継続的) 〈彼は(〔筆者付記：台所に〕すわって)恐ろしい興奮にみまわれていた。〉

[..] alt det arbejde, der blev betragtet som urent - det

gjorde den fremmede foragtet og frygtet i almuebefolkningen. (MF3 : 60) (一般的)

〈汚いものとみなされた仕事すべてのせいで，外国人が大衆の中で軽蔑され，恐れられた.〉

s-P の 6 例のうちの 2 例は明らかに一度かぎりの出来事に関することで，b-P のほうがより適当であろう．

[..] ekspeditionen [..] var kommet over i den mægtige Amazonflod blot ved at stige nogle hundrede meter op over et højdedrag og ned igen, den rene omstigningstur, der afløvedes med at de fældede et dusin træer, afløvede dem [..] (MF3 : 11)

〈探検隊は，ほんの数百メートル登り，尾根を越えて再び下ただけで大アマゾン河にたどり着いた．それは単なる乗り換えの行程で，木を12本切り倒し，それらの葉を落とし，…することでその行程は終わった（終えられた）〉

I Københavns dommervagt fængsledes i går en 33-årig mand for grov vold og voldtægtsforsøg mod sin gravide kæreste. (FJ : 90)

〈コペンハーゲン市裁判所での予審で昨日33歳の男が妊娠していた自分の恋人に対する暴行罪と強姦未遂で拘置された.〉

次の例は継続性があるので，s-P が用いられたのであろう．

[..] det skulle ikke kunne siges om hende, at hun ikke levede op til, hvad der krævedes. (MF2 : 44)

〈要求されていることに彼女が応えていなかった，と誰かが彼女について言うようなことがあってはならない.〉

残りの 3 例は継続性を表す *føltes* であり，この動詞は b-P で置き換えることのできない動詞の一つである（後述）ので，s-P が当然である．

Rolf var meget stor, meget sort og meget sikker, hvad der føltes betryggende. (MF1 : 12)

〈Rはとても大きく，とても黒く，とてもしっかりしていて，安心であると感じられた。〉

Luften var klar og føltes ren, selv om de var inde i byen. (MF1 : 33)

〈彼等が街中にいたにもかかわらず，空気は澄んでいてきれいに感じられた。〉

Det sneede tæt og fnuggene føltes som isnåle mod kinderne efter de mange timer i det opvarmede tog.

(MF3 : 44) 〈雪が激しく降っていて，暖房の入った列車に何時間もいた後の頬には雪片が氷の針のように感じられた。〉

上で føles に関して触れたように，s-P でのみ用いられる一連の動詞がある．所有を表す動詞，have, få, eje 等々；知覚，思考，知識等を表す動詞，føles, mærkes, menes, vides, kendes 等々である (cf. Aa. Hansen : 146f., Mikkelsen : 380)．

以上のことから，外国人がデンマーク語の受動態の過去形を書くときには，上記 føles 以下一連の動詞を除いては，blive-passivを用いるようにすればよいと思われる．

5. 完了形

受動態の完了形に関しては s-P か b-P のどちらを選ぶべきかという問題は生じない．というのは，§ 2 で見たように s-P には完了形は存在しないからである．そこで b-P の完了形を用いることになるが，b-P の完了形は er/var+blevet+過去分詞である．また blevet が省略されて er/var+過去分詞となることもある．それは，特に行為よりも状態に関心が置かれているときであるとして，er/var+過去分詞を状態受動，er/var+blevet+過去分詞を

動作受動とする向きもあるが(山野辺 1986: 104, Afzelius *et al.* 1986: 61), この場合の *er/var*+過去分詞はあくまで blevet の省略された動作受動であり, 状態受動とは別のものであると認識する必要がある(cf. Diderichsen 1976: 134, Aa. Hansen 1967: 143).⁹⁾

ただ, 動作受動の *blevet* が省略されたものは状態受動と外見上まったく同じになることがあるのは事実である。

Porten er lukket.

〈その門は閉っている.〉(状態受動)

〈その門は閉められた/閉められてしまった.〉(動作受動)

このように, 状態受動か動作受動か判断がつき難い場合に(しかも, 前後関係からもわかりにくい場合に), 動作受動であることを強調しようと思えば, 当然 *blevet* を加えればよいわけであるが, それ以外にも方法はある。つまり, 時の副詞を補うか, 動作主を示すことである(Lomholt 1982: 141)。

Huset er endnu ikke solgt. (Lomholt: 141)

〈その家はまだ売れていない.〉

Christianshavn er bygget af Christian 4.¹⁰⁾ (Lomholt: 141) 〈クリスチャンスハウンはC 4世によって築かれた.〉

FJ の第10課はデンマークの政党について説明しているが, 各政党の説明に当てはまる設立年を挙げている(FJ: 61-67)。

(A) [Socialdemokratiet] Partiet blev dannet i 1871 af Louis Pio.

(B) [Det Radikale Venstre] Partiet er stiftet i 1905 efter brud med partiet Venstre [..]

(C) [Det Konservative Folkeparti] Partiet er dannet i 1915.

(E) [Danmarks Retsforbund] Partiet er dannet i 1919.

(F) [Socialistisk Folkeparti] Partiet blev stiftet i 1959

efter brud med Danmarks Kommunistiske Parti. Partiet blev dannet af Aksel Larsen, der mente [..]

(K) [Danmarks Kommunistiske Parti] Partiet blev stiftet i 1919.

(M) [Centrums-Demokraterne] Partiet blev stiftet af Erhard Jakobsen i 1973, efter at han havde brudt med Socialdemokratiet [..]

(Q) [Kristeligt Folkeparti] Partiet blev dannet i 1970.

(V) [Venstre, Danmarks Liberale Parti] Det nuværende parti Venstre blev stiftet i 1910.

(Y) [Venstresocialisterne] Partiet blev dannet i 1967 efter strid med Socialistisk Folkeparti [..]

(Z) [Fremskridtspartiet] Partiet blev stiftet i 1972 af landsretssagfører Mogens Glistrup i protest mod de høje indkomstskatter.

ここでは文章にバラエティーをもたせるためであろうか、同義語である danne〈組織する〉と stifte〈設立する〉を混せて使っているが、それだけではなく blev dannet/stiftet に混じって er dannet/stiftet が用いられている。(C), (E) の Partiet er dannet i 19×× と (Q) の Partiet blev dannet i 19×× とではどれだけ意味の違いがあるのでしょうか、また (B) の Partiet er stiftet i 19×× efter brud med ～ と (F) の Partiet blev stiftet i 19×× efter brud med ～ とではどれだけ意味の違いがあるのでしょうか。er dannet/stiftet が状態受動を表しているのではないことは、(A)～(Z) の流れから明らかであろう。設立年(時の副詞)が示されていることでもわかる。したがって、er dannet/stiftet は動作受動の完了形であると言える。ただし、完了形は本来、過去の一時点あるいは一時期を示す時の副詞とは共起できないと —

教育的見地からか(？) — 言われている (cf. 山野辺: 97f., Afzelius *et al.*: 56f.) が, 実はそうではない. 過去の一時点あるいは一時期を示す時の副詞が文頭に来る場合には過去形が要求されるが, この種の副詞が中域や後域に置かれると完了形がくることも可能である (Jespersen 1958: 384ff., Glismann 1986: 250ff., Mikkelsen 1975: 435f.). ただ, *er dannet/stiftet* では現在もその政党が存在することが予想されるという点ではやはり現在完了であるが, FJ のこの箇所では *blev dannet/stiftet* と *er dannet/stiftet* は無差別に使われていると言えよう. 著者のこの文体的試みは到底好ましい方法とは思えない.

以上のことから, 動作受動の完了を示す場合には *er/var+blevet* + 過去分詞とし, *blevet* を省略しないほうがよいであろう. 特に, 限界のない動作を示す未完了相動詞の場合には絶対に *blevet* を省略してはならない. というのは, *han er blevet agtet* は〈彼は尊敬されるようになった〉を意味するが, *han er agtet* は〈彼は尊敬されている〉を意味し, *han agtes* や *han bliver agtet* と同義だからである (Lomholt: 141, cf. Jespersen: 390). (もっとも, *han bliver agtet* は〈彼は尊敬される〉の意で, 未来をも意味するが (§3 参照).)

6. 不定詞

6.1. *at*-不定詞

受動態の不定詞は, §2 で触れたように, Løj & Wille: 16 は *s-P* は *at* の付かない裸の不定詞のみ用いられると言う (“*S-passiven findes i infinitiv [...]: i infinitiv findes kun den nøgne form uden ‘at’*”).

日頃デンマーク語の文章に接していて, *synes* とか *skændes* といった中立態の *s*-形動詞の *at*-不定詞を見ているせいであろうか,

s-P の at-不定詞も存在するものと思っていた筆者は Løj & Wille のこの言葉に少なからず驚いた。

外国人向けの学習書で s-P の at-不定詞が見られるものがある： at spises, at passes (Schiøler & Hansen: 12), at bruges (森田 1981: 61), at skrives (山野辺: 104)。(もっとも、これらは文中に出てくるのではなくて、屈折変化表の中に出てくるのであるが。)

Mikkelsen: 384 は、at-不定詞の場合にも s-P と b-P の基本的違いは保たれると言う。

Hun kan godt lide at roses af folk. (Mikkelsen: 384)

〈彼女は人に誉められるのが好きだ。〉(反復性)

Udsigterne til at blive rost ved denne lejlighed var ikke store. (Mikkelsen: 384)

〈この機会に誉められる見込みはあまりない。〉(一回性)

Mikkelsen は同書の389頁で s-P の at-不定詞の例をさらに8個挙げている。

一方、Aa. Hansen: 147 は、at-不定詞では b-P のほうが好まれと言う。

つまり、かつて (Mikkelsen, 初版 1911) は、at-不定詞の場合も s-P と b-P は意味によって使い分けられていたのが、最近 (Aa. Hansen 1967) になって、b-P が好んで用いられるようになったのであろう。

MF1-3, FJ の調査結果を表1で見ると、at-不定詞は11例あり、そのうち s-P は1例もない。

筆者は受動態の不定詞に関して MF1-3, FJ 以外の資料を調べてみた (調査対象は BodGen, BodJeg, ChrSund, EngUdd, FriLiv, LD, SøbVent, VørsDan である。本稿末の資料リストを参照)。その結果、MF1-3, FJ を含めて、at-不定詞は33例あり、そのうち b-P は30例で、s-P は3例であった。これらの用例を見ると、上で示した

Mikkelsen の説明とは異なり, b-P の at-不定詞が b-P と s-P の両方の基本的意味領域をおおっている.

[..] og hun havde været i stor fare for at blive taget af tyskerne og blive smidt i fængsel. (MF1: 54)

〈そして彼女はドイツ人たちに捕えられ, 投獄される危険が大きかった.〉

Jeg traver forbi de samme grave igen og igen, mener at have været helt systematisk gennem det rigtige område og er ved at blive grebet af panik, [..] (BodJeg: 8)

〈私は何度も何度も同じ墓のそばを足早に通り過ぎる. 私は該当する一画を端から端まで完全に順序良く見てまわったつもりなので, パニックに見舞われそうになる.〉

[..] kvinder kan lide at blive erobret, det er ikke meningen manden skal give op for den første modstand.

(SøebVent: 42) 〈女は征服されるのが好きなのよ. だから男は最初の抵抗であきらめちゃだめよ.〉

Fra at være en ynket gruppe i samfundet risikerer de ældre at blive betragtet med misundelse fra de yngres side. (FriLiv: 455)

〈高齢者たちは, 社会における同情されるグループであることから変わって, 若い人たちからねたみの目で見られることになりかねない.〉

Både hun og hendes mand havde fortjent at blive passet, i stedet for at skulle passe andre, [..] (BodJeg: 8)

〈彼女と彼女の夫の二人とも, 他の人たちの面倒をみなければならぬかわりに, 自分たち自身が当然面倒をみてもらってしかるべきだった〉

Det var Europæerne i høj Grad imod at blive svaret

saadan, det var maaske de indfødte i højeste Grad imod
at blive saadan spurgt. (MDF : 102)

〈そういうふうに返答をされることにヨーロッパ人たちは大いに反対でした。しかし、そういうふうに質問されるのは原住民たちは恐らくいちばんいやだったでしょう。〉

一方、3例ある s-P は次のようである。

Lidt efter fulgte hun efter en museumsbetjent [...]; ned ad en stejl og smal spindeltrappe, hvis gennembrudte trin hendes hæle hele tiden var lige ved at fanges i. (BodJeg : 27) 〈少ししてから彼女は美術館員について行った…急な狭い螺旋階段を降りて行ったが、その間ずっと彼女はその隙間の開いた段にかかとを取られそうになった。〉

Vinduerne trænger til at pudses. (BodJeg : 52)

〈窓を磨く必要がある。〉

[...] han sparker til støvbolder - den er for stor til at spises [...] (BodGen : 16)

〈彼はそのホコリタケを蹴っている。[筆者付記：ホコリタケはふつう食べられるが] それは大きすぎて食べられないから…〉

上の at fanges, at pudses, at spises のどれも Mikkelsen: 384 の言う、反復性を意味するものではなく、一回性を意味する。これらが s-P である必然性は何もない。単なる作家の好みであろうか。

上の at-不定詞はどれも Anders Bodelsen の作品中にある。BodGen も BodJeg も比較的最近の作品である (BodJeg は初版が1987年。その内容から判断しても1984～1985年以降に書かれたものであることは間違いない)。BodGen と BodJeg には at-不定詞が9例あり、そのうちの3例のみが s-P である。これはどう解釈すべきか。Anders Bodelsen だけに見られる特徴であろうか。それを判断するには今回筆者が行った調査は余りにも小規模すぎる。

ただ、次のように言えよう。Løj & Wille: 16 のように、s-P は at-不定詞では用いられないと断言するのは正しくないが、やはり外国人がデンマーク語作文で passiv の at-不定詞 を使う場合は、blive-passiv の at-不定詞 だけを用いるほうがよいであろう。

6.2. 法の助動詞と受動態の裸不定詞

Aa. Hansen: 54f. は、法の助動詞は未来のこと、可能なことを表すときには b-P の不定詞を取り、それ以外のときには s-P を取るという。これは書き言葉、話し言葉に関係ないと言う。つまり、書き言葉は s-P を好み、話し言葉は b-P を好むという現在形等で見られる傾向はここでは当てはまらないということである。

これは表 1 からわかる。MF1-3 では受動態が75例あるうち s-P の裸不定詞が23例あり、30%を占める。一方、FJ では 受動態145例中、s-P の裸不定詞が45例で、31%を占めている。

法の助動詞と受動態の関係は、大体は上で Aa. Hansen が言っている通りの印象を受けるが、周知の通り、b-P が skal と共起するときには、未来と可能以外の意味で、たとえば約束の意味で用いられることがある。

Han købte papegøjen, og ekspedienten lovede at den skulle blive bragt ud til hendes adresse. (SøebVent: 103)

〈彼はそのオウムを買った。店員はそれを彼女の住所まで届けることを約束した。〉

このように、実情は Aa. Hansen の言うようには単純ではないようである。E. Hansen 1972 は、法の助動詞 ville, skulle, måtte, burde (しかし kunne, turde は扱っていない) がその本来の意味を表す場合には s-P が用いられ、法の助動詞が発話全体にかかる (suprasegmental の) 場合¹¹⁾と、文の主語以外の人(発話者、聞き手、あるいは第三者)の意志を表す場合には b-P が用いられる

と言う。法の助動詞が発話全体にかかる場合とは、ville の「未来」、skulle の「推量」、måtte の「確実性」等々である。¹²⁾ 法の助動詞が文の主語以外の人の意志を表す場合とは、たとえば上の例文中の skal の「約束」(= 発話者の意志)がある。

本稿末の資料に出て来る、法の助動詞 (ville, skulle, måtte, burde, kunne, turde) + 受動態の不定詞の例を集めてみると、238 例あった。そのうち 27 例が b-P である。このわずかな例から、法の助動詞との結合における s-P と b-P の関係について、説得力ある結論を導き出すことは困難であろう。

7. むすび

本稿では s-P と b-P の関係を、現在形、過去形、完了形、at-不定詞について検討し、外国人学習者がデンマーク語作文で受動態を必要とする場合に、s-P と b-P のどちらを選ぶのがよいかについて大体のガイドラインを示した。

§1 で示した試訳中の De bruges, burde bruges, at blive brugt をそれぞれ De bliver brugt, burde blive brugt, at bruges としてもよいかどうかという問題は、本稿で検討したことを念頭に置き次のようにすればよい。

De bruges は、ここでは反復あるいは一般的なことを表すべきところであるので、bliver brugt は用いないほうがよいであろう。

at blive brugt は、受動態の at-不定詞は s-P を用いないようにすべきだから、このままでよい。

burde bruges に関しては、法の助動詞と受動態の不定詞との関係を本稿で扱えなかったのが、答えを出すのを保留するが、この場合は意味の点から s-P となるはずである (cf. E. Hansen)。この問題については、残念ながら今回は見送ることにする。今後、多くの資料を検討するつもりである。

(30/8 '90)

注

- (1) Løj & Wille: 7 は Poulsen, Ib. 1976. *Skriv bedre. Nogle bemærkninger til arbejdet med skriftlig fremstilling.* Kbh., 57f. を挙げている.
- (2) 態 (diatese) は本来、動詞の表す行為の方向性 (能動/受動) が動詞の形態に現れる場合を言う. デンマーク語の場合は -(e)s に終わる動詞形態をふつう受動態と呼ぶ (これを本稿では s-passiv と呼ぶ). (synes, lykkes 等はふつう中間態あるいは中動態と呼ばれる). デンマーク語では受動を表現するのに、この s-passiv の他に助動詞 blive+過去分詞の形式がある (これを本稿では blive-passiv と呼ぶ). blive-passiv はいわゆる動詞の形態ではないので、動詞の態ではなく、本来は受動態とは呼べないが、本稿では便宜上受動態と呼ぶことにする. したがって本稿で受動態と言うのは s-passiv と blive-passiv の両方を指すことになる. また、受動態により構成された文は受動文である. この受動文をも受動態と呼ぶ場合があるようであるが、これは上述の態の説明でわかるように不都合である.
- (3) この典型的な例として Løj & Wille: 15 は次の文を挙げている.

Orlogskaptajnen var blevet myrdet, men politiet fandt aldrig frem til morderen.

〈その海軍指令官は殺害されたが、警察が殺人犯を割り出すことはなかった.〉

- (4) MF1-3, FJ に出てくる裸不定詞の例は、ただ一つの例外を除いては、法の助動詞との結合においてである. ただ一つの例外とは、

Min far går just derud, og genkender ham straks, byder ham ind i stuen, og lader ham beværtes, hvortil han virkelig trængte, som hans magerhed og bleghed udviste. (MF3: 61)

〈私の父がちょうど玄関に出て行き、彼が誰かすぐに思い出し、彼を中に招じ入れ、もてなさせる. 彼のやせ細り、顔色の悪い様子から、本当にその必要があったことがわかった.〉

lade+目的語+他動詞の不定詞 (+af+動作主) の構文で、他動詞の不定詞は受動の意味をもつ. したがって、上の例文では lader ham beværte とするのが良く、例文のように beværtes とすると情報過多で、文法的に

誤りとされかねない。少なくとも、外国人学習者は真似るべきではない。したがって、この *bevært* は表 1 に含まれていない。

- (5) 十中八九は中立態（中間態あるいは中動態と呼ぶ人もいる）であろうが、わずかながらも理論的には受動態だと言えなくはないケースが 1 例ある。

Nogle døre ude på trappen åbnedes og smækkede, og hun kunne høre folk styrte ned ad trapperne [...] (MF1: 53)
〈外の階段の所のドアがいくつか開いて、ボタンと閉った。人々が階段を駆け下りていくのが彼女には聞こえた〉

この文中の *åbnedes* は、理論的には（ドアを開けた行為者の存在を意識するときには）受動態過去形で〈閉められた〉を意味すると考えることもまったくできなくはないが、ここでは自動詞の *smækkede*（他動詞 *smække* の受動態過去形である *smækkedes* とはなっていない）と同価値と考え、再帰動詞 *åbne sig* 〈開く〉と同義の中立（中動）態の意味をもつ動詞であると考えるのが一番自然であろう。したがって、この文は受動文ではないので本稿の論旨とは無関係であり、この *åbnedes* は表 1 には含まれていない。

- (6) *blive-passiv* との対立以外に、*s-passiv* が完了相の意味をもつべき必然性/理由はないであろう。
- (7) このように *blive* は基本的には完了相であるが、場合によっては未完了相のうちの 1 つである反復相を表す。つまり、デンマーク語では動詞の相 (*aspekt*) の違いが形式上（派生等）現れないが、相の違いが形式上の違いとして現れる言語もある。たとえば、ロシア語で *читать* 〈読む〉は未完了相動詞であるが、これに接頭辞 *про-* の付いた *прочитать* 〈読み終える、通読する〉はこれに対応する完了相動詞である。*прочитать* にさらに接尾辞 *-ивать* が付くと反復相を意味する *прочитывать* 〈(くり返し/何度も/いつも) 通読する〉となり、これはもちろん未完了相動詞である。
- (8) *Byg bruges især til ølbrygning og foder* とするのがふつうである。
- (9) 状態受動の場合に、過去分詞は主語と性・数の一致がないので完全な形容詞とは言えない。たとえば、

Vinduerne er pudset. (Afzelius *et al.*: 61)

〈その窓（複数）は（磨かれて）きれいだ〉

では、主語 *vinduerne* が複数であるのに、述語は *pudsede* となっていない

ことに注意.

- (10) Mikkelsen: 384 には次の例文がある.

Børsen er bygget af Kristian [= Christian] den fjærde
[= fjerde].

この文は動作主を伴っているが, Mikkelsen は状態 (受動) 文 (tilstands-art) とし, B. er et værk af Kr. d. f. <証券取引所はC 4 世の建造物である>と同義であるとする. しかし, Mikkelsen: 384f. は状態 (受動) 文が話し言葉では受動文の完了と同義 (つまり, er/var+過去分詞 = er/var+blevet+過去分詞) でしばしば用いられるとする. つまり, Mikkelsen (1911年初版) に従うと, 上の例文 B. er bygget af Kr. d. f. は話し言葉では B. er blevet bygget af Kr. d. f. と同義となるはずである. すなわち, Mikkelsen は, 受動態の完了形から blevet が省略されると現在ではふつうは言われている現象をまったく考慮していない, というよりもまったく別の角度からとらえていることがわかる.

- (11) 認知的 (epistemic) (cf. 浅川・鎌田 1986: 165ff.) とも非人称的 (im-personal) (中島 1980: 153ff.) とも言う.
- (12) burde の suprasegmental な意味は明確とは言えないであろう (cf. E. Hansen: 23f.).

Om brugen af s-passiven og blive-passiven i moderne dansk

Toshihiro Shintani

Resumé

Når man som udlænding skriver på dansk og kommer i den situation, at man skal lave en passiv sætning — hvad skal man gøre? Man ved, at en passiv sætning kan dannes enten ved hjælp af verbets bøjningsform, der ender på -(e)s — kaldet s-passiven — eller ved hjælp af hjælpeverbet *blive* + perfektum participium — kaldet blive-passiven. Men hvordan er forholdet

mellem s-passiven og blive-passiven? Kan man vælge frit mellem dem?

S-passiven og blive-passiven adskiller sig fra hinanden, hvad angår deres forekomst, bl.a. i tempus (cf. Løj & Wille 1985 : 16): s-passiven findes i infinitiv, præsens og præteritum (i infinitiv findes kun den nøgne form uden *at* [eller rettere foretrækkes den nøgne form næsten altid]), mens blive-passiven findes i infinitiv (både med og uden *at*), præsens, præteritum, præsensperfektum og plusquamperfektum. Derfor er det kun i præsens, præteritum og infinitiv uden *at*, man kommer ud for den ovennævnte valgmulighed.

Om s-passiven og blive-passiven siges der desuden stort set følgende: ● S-passiven bruges om det gentagne, vanemæssige eller vedvarende, mens blive-passiven bruges om det enkelte eller en overgang til en ny tilstand. [Dette er altså de to passivformers karakteristika og grundlæggende forskel.] ● Blive-passiven kan oftest bruges i stedet for s-passiven (undtagen i forbindelse med modalverber i deres bestemte betydninger). ● I talesprog foretrækkes blive-passiven. ● Der er nogle stærke verber, som normalt ikke forekommer med s-passiv i præteritum (fx *bede*, *byde*, *smide*, *tvinge*). Der synes i det hele taget at være en tendens til at undgå s-passiv i præteritum.

I denne artikel har jeg prøvet at skitsere forholdet mellem de to passivformer ved at gennemgå nogle sætninger med passiv taget fra moderne kilder (se bagest i denne artikel). Derved håber jeg, jeg kan give en nybegynder i dansk (stil) en retningslinje for brugen af de to passivformer: ● I præsens: brug de to passivformer efter den grundlæggende forskel mellem dem. ● I præteritum: brug blive-passiven (bortset fra de tilfælde, hvor blive-passiven ikke forekommer, fx ved verber, der betegner vedvarende sansning, mening, tænkning, viden o.l.: *føles*, *mærkes*, *vides* osv.). ● I infinitiv med *at*: brug blive-passiven.

Dertil kommer: ● I perfektum: undlad aldrig *blevet*.

Brugen af s-passiven og blive-passiven i forbindelse med modalverberne har jeg ikke kunnet nå at behandle i denne artikel. Men det vil blive behandlet ved en senere lejlighed.

参 考 文 献

(外国文献の発行地は特記のないかぎり København)

- Afzelius, Otto *et al.* 1986. *Dansk grammatik for udlændinge*. Specialpædagogisk Forlag (tidligere udgaver: Dansk Flygtningehjælps Sprogskole).
- 浅川照夫・鎌田精三郎 1986.『助動詞』(新英文法選書4). 大修館書店.
- Diderichsen, Paul. 1964. *Essentials of Danish Grammar*. Akademisk Forlag.
- . 1976. *Elementær dansk grammatik*. 3. udg. Gyldendal.
- Glismann, Otto. 1986. "Om tid og tempus. Et forsøg på en fænomenologisk forståelse af de verbale tempusformers betydning", *Nys* (= *Nydanske studier & almen kommunikationsteori*) 16 · 17, 237-257.
- Hansen, Aage. 1967. *Moderne dansk* III. Grafisk Forlag.
- Hansen, Erik. 1972. "Modal interessens. Nu bør det (komme) frem", *Danske Studier* 1972, 5-36.
- Jespersen, Otto. 半田 一郎 訳 1958.『文法の原理』. 岩波書店.
- 秦 宏一 1978.『デンマーク語の入門』. 白水社.
- Jones, W. Glyn & Gade, Kirsten. 1985. *Danish, A Grammar*. 2. opl. Gyldendal.
- Koefoed, H. A. 1989 (1958). *Danish* (Teach Yourself Books). Hodder and Stoughton.
- Lomholt, Jørgen. 1982. *Le Danois Contemporain*. Akademisk Forlag.
- Løj, Mogens & Wille, Niels Erik. 1985. "Kan vi undvære passiv? eller: Kan passiv virkelig undværes? En undersøgelse af passivformernes grammatik, stilistik og pragmatik.",

Nys 15, 5-42.

Mikkelsen, Kr. 1975 (1911). *Dansk ordføjningslære*. Hans Reitzels Forlag.

森田貞雄 1981 (1971).『デンマーク語文法入門』. 大学書林.

中島文雄 1980.『英語の構造』(上). 岩波書店.

岡田令子・菅原邦城・間瀬英夫 1984.『現代デンマーク語入門』. 大学書林.

Rehling, Erik. 1934. "Om brug af passiv i dansk", *Studier tilegnede Verner Dahlerup*, 80-88. København - Aarhus.

Schiøler, Else & Hansen, Ellen. 1986 (1978). *Dansk grammatik for folkeskolen*. 2. udg. 7. opl. G. E. C. Gad.

山野辺五十鈴 (編著) 1986.『自習デンマーク語文法』. 大学書林.

資料

Nellemann, George *et al.* (red.). 1988. *Daglivliv i Danmark i vor tid*. 1. Nyt Nordisk Forlag Arnold Busck.

BodGen= Bodelsen, Anders. 1973. "Genfortælling", *Lov og orden*. 2. udg. 1. opl. Spektrums Paperbacks. 11-32.

BodJeg= Bodelsen, Anders. 1989 (1987). *Jeg kommer til at løbe*. 3. udg. Gyldendals Paperbacks.

ChrSund= Christensen, Vagn. 1988 "Sundhed for alle", Nellemann *et al.*, 247-273.

EngUdd= Engberg, Agnete. 1988. "Uddannelsessamfundet", Nellemann *et al.*, 216-246.

FJ= Planck, Christian. 1987. *Familien Jensen - og alle os andre. Danske tekster for udlændinge*. 2. udg. 2. opl. Jørgen Paludans Forlag.

FriLiv= Friis, Henning. 1988. "Livet som ældre", Nellemann *et al.*, 437-454.

LD= Hildeman, Niels-Gustav & Hedbäck, Ann-Mari. 1983. *Lær dansk*. 1. udg. 10. opl. Gjellerup.

MDF= Stemann, Ingeborg & Nissen, Mogens. 1979. *Moderne dansk*

for udlændinge. For lidt viderekomne. 3. udg. 4. opl.
Gyldendal.

MF1 = Wraa, Ingrid & Dalager, Niels (red.). 1987. *Myrens fortællinger 1. 6 fortællinger på et ukompliceret dansk.* Forlaget Myren. Middelfart. (Bødker, Cecil. "Juletræstyven", 11-19. Turèll, Dan. "Hjemløs kærlighed", 21-23. Hansen, Hans. "Vore grønne hjerter", 25-30. Varmer, Hjørdis. "Er du én af dem?", 33-42. Nordbrandt, Henrik. "Hullet i kælderen", 45-50. Nehm, John. "Fast ophold", 53-57. を収録)

MF2 = Wraa, Ingrid & Dalager, Niels (red.). 1987. *Myrens fortællinger 2. 6 fortællinger på et ukompliceret dansk.* Forlaget Myren. Middelfart. (Bodelsen, Anders. "Jeg forstår godt du er vred", 11-18. Svendsen, Hanne Marie. "Minoldemor", 21-24. Poulsen, Peter. "Søndag morgen. Skumring ved vinduet, en sang", 27-30. Lund, Niels. "Udsigt fra oven - måske", 33-38. Christensen, Martha. "Sønnen", 41-45. Grønfeldt, Vibeke. "Den gule kjole", 47-52. を収録)

MF3 = Wraa, Ingrid & Dalager, Niels (red.). 1989. *Myrens fortællinger 3. 7 fortællinger på et ukompliceret dansk.* Forlaget Myren. Middelfart. (Seeberg, Peter. "Orinoco-Amazon", 11-15. Thorup, Kirsten. "Påskeliljer", 17-20. Bang, Carl. "Irenes ting", 23-27. Tafdrup, Pia. "Sten for sten", 29-36. Borberg, Jytte. "Din sjæl står bagved dig", 39-46. Krasilnikoff, Arthur. "Den uigenkaldelige historie", 49-55. Møllehave, Johannes. "Om gæstevenskab - med tryk på venskab", 59-64. を収録)

SøebVent = Søeborg, Finn. 1976. *Ventesal for ikke-rygere.* 2. udg. 3. opl. Rasmus Navers Forlag.

VørsDan = Dehn-Nielsen, Henning & Stubkjær, Jens. 1984. "Uddannelsernes mange trin", *Værsgo' Danmark 1984.* Forlaget Aktuelle Bøger, 299-319.